

第3章

鹿角地域の歴史文化の特性

1節

歴史文化の特性 一青垣山をめぐらせる鹿角の里一

鹿角地域は、奥羽山脈の山並みに抱かれ、鹿角地域を南北に縦貫する米代川とその支流から形成された花輪盆地を中心に人々の生活が営まれてきた。南北にまたがる十和田八幡平国立公園をはじめ、金属鉱床資源や森林資源、温泉といった自然環境に恵まれ、人々は自然を生活の糧としてきた。特に鉱山によって地域は大きく発展した。

また、鹿角地域は秋田県の最北東部、北東北3県のほぼ中央に位置し、北は青森県、東は岩手県に接し、古くから西の羽州街道と東の奥州街道を結びつけ、交通の要衝として様々な地域と交流があった。縄文時代の遺跡から出土した土器などは、米代川流域だけでなく、東北地方南部や北海道とも交流を示す。山間の地域でありながら、古代から中世にかけて、中央の貴族や僧侶などが鹿角地域を訪れたことが彫刻や記録、地域の伝承からうかがえる。近世には、盛岡藩の藩境に位置し、鉱山経営や森林資源の活用のため、鹿角街道などが整備された。こうした背景が様々な形の信仰や習俗、民俗芸能など豊かな文化を育んだ。

かつて石川啄木は「青垣山を繞らせる天さかる鹿角の国」と詠んだ。豊かな山並みに囲まれ、湖水があり、高原があり、所々に温泉が湧き、山の幸、川の幸、地の幸に恵まれた風光の中に織り成してきた人々の文化は、この「青垣山をめぐらせる鹿角の里」という言葉に象徴される。

鹿角地域の歴史文化の特性を以下のとおりまとめることができる。



青垣の山々と花輪盆地
(鹿角地域)

1. 山島 鹿角 -歴史文化を育む自然環境-

(1)概要

鹿角地域は四方を山並みに囲まれ、火山現象や多雪条件により形成された湖沼や温泉のほか、金属鉱床資源、森林資源など、山の幸、川の幸、地の幸に恵まれた自然環境を有し、人々の生活に密接に結びつく。



十和田八幡平国立公園大沼
(八幡平地区)

(2)内容

鹿角地域は四方を山並みに囲まれ、火山現象や多雪条件により形成された湖沼や温泉のほか、金属鉱床資源、森林資源など、山の幸、川の幸、地の幸に恵まれた自然環境を有している。この山並みが花輪盆地を取り囲む様子は柳田國男に師事した花輪地区出身の民俗学者(人文地理学者)佐々木彦一郎によって「山島」と例えられた。また、牧野富太郎が調査を行った植物は低地から亜高山帯まで広域に及び、火山地域であることから植物の種類が豊富である。

①火山

国立公園に指定される十和田湖や八幡平など、日本有数の火山地域である鹿角地域には、火山現象や多雪条件により長い時間をかけて形成された湖沼や多くの温泉がある。温泉は湯治場として長く親しまれ、鹿角地域に暮らす人々だけでなく各地から訪れる湯治客を癒やした。特に大湯温泉は江戸時代には盛岡藩藩主の湯治場であり、湯治や近隣風景の様子が記録に遺る。また、十和田火山の活動が八郎太郎伝説を生み出したとされる。



湯瀬渓谷
(八幡平地区)

②水

中岳を水源に鹿角地域を南北に流れる米代川をはじめ、各所の河川は古くから生活用水としてだけでなく、紫根染・茜染などの染物や酒造り、野鍛冶などの産業も生み出した。また、米代川は語源の一つにだんぶり長者物語がある。だんぶり長者の屋敷から朝夕に流れ出る炊ぎ水で川が白く濁ったと伝わる。人々は米のとぎ汁を意味する泊の字を用いて泊江と称することもあった。米代川流域に伝わる八郎太郎伝説は、十和田火山の火山泥流が米代川を下った様子を表現した壮大な物語である。

現在は急峻な山から流れる河川や火山現象による地熱を利用した発電を行っており、産業や生活を支えるエネルギーを生み出し、人々の生活に密接に結びついている。

2. いにしえの里 鹿角 -自然に適応したくらし-

(1)概要

鹿角地域の人々は自然に適応しながら生活を営んだ。縄文時代から生活の痕跡が残り、鉱山が開かれると山林や田畠から多くの恩恵を受け、生活文化に大きな影響を与えた。民謡や伝説・民話が多く伝わり、生活の様子や自然への畏怖の念を表現する。

(2)内容

山並みに抱かれ、豊かな自然の恵みを受けた鹿角地域は古くから人々が生活を営んできた。人々は自然に適応しつつ生活した様相は遺跡や民謡、伝説・民話などとして遺る。江戸時代以降には主要な産業資源として山林や鉱山の利用が進んだ。

日本民俗学の創始者柳田國男が講演で文化の特異性を述べた鹿角地域の伝説・民話や方言などは、鹿角出身の東洋史家である内藤湖南や内田武志によって文献に記され遺される。

①特徴的な遺跡群

鹿角地域における人々の活動の痕跡は9000年前の縄文時代早期までさかのぼることができる。縄文時代には米代川流域及びその支流沿いの標高120～190mの高台で活動した。人々は狩猟採集生活をしながら、環境にあわせた道具を作り、他地域と交流しながら生活した。そして自然への感謝と畏怖の念からまつりや儀式を行った。

特別史跡「大湯環状列石」は、縄文時代後期の共同墓地や儀式などを行う場で、10数個の石を並べた円形や四角のかたまりがいくつも並べられ円形をなしている。鹿角地域では同時期に高屋館などでも環状列石が発見され、縄文時代の精神文化が現される。この環状列石に発達するまでの移り変わりは縄文時代中期の天戸森遺跡で知ることができる。



大湯環状列石
(国指定、十和田地区)



田園風景
(鹿角地域)

②鹿角のくらし

中世には土地の起伏を生かして館が造られ、周辺に集落が形成された。耕地の開拓に努めた鹿角地域は、江戸時代に新田開発が進み、米作りの土地となった。山々はウド、タラノメ、フキ、タケノコ、ゼンマイ、キノコ、山ぶどうなど実りをもたらし、山肌をぬう沢川はイワナやヤマメなどで人々の食を潤した。山里に住む山子は山を敬い、感謝し嘗々と山仕事を続けた。沢を流れ出た水は小坂川、大湯川、間瀬川、不動川、福士川、熊沢川、夜明島川となり米代川に合流する。これらは盆地低部の肥沃な土地に豊富な水を供給し、稲作が広まり豊かな暮らしをもたらした。鉱山が開かれると、山林や田畠から多くの木材や食料が供給された。一方で各地から労働者や文物の流入が盛んになり、生活文化に大きな影響を与えた。

農作業や山仕事をなどから、「鹿角牛方節」、「おやまこ」、「鹿角甚句」などの民謡が生まれた。「きりたんぽ」に代表される食文化もある。これらには鹿角地域の人々の暮らしの一端が表現されている。

こうした生活の様子は菅江真澄や松浦武四郎らによって記録された。

③伝説の里

鹿角地域に現在まで100を超える伝説・民話がある。鹿角地域が文献に現れるのは平安時代であるが、古くから中央との交流があったことをうかがわせる「錦木塚物語」、「だんぶり長者物語」などの伝説が語り継がれる。また、鉱山の発見や鉱山に関する「光る怪鳥伝説」などがある一方で、山姥、大蛇、オニなどが登場する物語も多く、自然への畏怖の念も表現される。またマタギの生活を伝える「左多六とシロ」や飢饉の様子を伝える「稻さついた白い虫」などからは当時の生活の様子がうかがえる。これらの伝説・民話は地区のアイデンティティとして受け継がれる。

3. 境のマチ 鹿角 -境目の地域の交通と交流-

(1)概要

鹿角地域は自然資源に恵まれ、古くから西の羽州街道と東の奥州街道を結び付け、江戸時代は盛岡藩と秋田藩の境の位置となり交通の要衝だった。盛岡藩重臣の配置により花輪・毛馬内の町割りが整備され、人々の往来が盛んとなる商業の中心地として発展した。



花輪通絵図
(市指定、花輪地区周辺)

(2)内容

鹿角地域は奥羽山脈を越え、古くから西の羽州街道と東の奥州街道を結びつける連絡路・横断路を担った。人々の往来は鉱山など開発によってさらに盛んな地域となった。江戸時代には鉱山経営や藩境警備の重要性から盛岡藩の重臣が配された。

盛岡城下から秋田領へ通じる道は、「鹿角街道」と呼ばれ、盆地をとりまく山々を越え外部と結ぶ峠道が人々の暮らしに重要な役割を果たした。また鹿角地域は花輪通と毛馬内通に分けられ、両方に盛岡藩の代官所が置かれた。一方で花輪・毛馬内・大湯は盛岡藩の重臣が配され、館(要害屋敷)を構え、知行地を持って家臣を抱えた。館の周辺には商人や手工業者が集まり、マチが形成されていった。

マチの人はムラをザイ(在)やザイゴ(在郷)と呼び、マチと農村集落のムラを区別した。マチはそれぞれ政治的・経済的中心となり、ムラの人々は米や野菜などを持って市日で売り、帰りには魚や古着などを買い求めた。花輪では尾去沢の鉱山労働者を金山衆^{かなやましゅう}と呼んでいた。特に明治以降は金山衆やムラの人々で大いに賑わい、花輪は国や県の役所が集まり、鹿角地域の政治・行政・商業の中心地となった。

毛馬内は慶長年間の白根金山の隆盛に伴い、藩主直々の命により毛馬内館を当麻館から南に移しその下に町が計画的に作られたと伝わる。毛馬内館(柏崎館)を中心に二の丸・三の丸・古町と屋敷が配され、館の西下に上町・中町・下町・御山見町と町割りされた。御山見町には、のちに月山神社の里宮が置かれた。

鹿角地域は、近代に入ると鉄道網の整備が進み、十和田湖の玄関口や奥羽本線との結節点としてさらなる発展を遂げた。

4. 黄金ふく青垣山 -豊かな金属鉱床資源がもたらす鉱山文化-

(1)概要

古くから金属鉱床資源に恵まれた鹿角地域は、鹿角小唄に「北も南も黄金花」と唄われ、国内でも有数の金や銅の富鉱地帯だった。鉱山の発展により独自の芸能や食文化などが生まれ、現在まで続く。



尾去沢鉱山
(尾去沢地区)

(2)内容

鹿角小唄に「青い垣山鹿角の里は昔二万石米の国深い思を煙に吐けば北も南も黄金花」と唄われたように鹿角地域は国内有数の金や銅の産出地帯で、江戸時代から大小の鉱山が数多くあった。

大規模なものとして北部に小坂鉱山、東部に不老倉鉱山があり近代に盛況をきわめた。また、中央部にかつて白根金山として栄えた小真木鉱山が、その南部に和同元(708)年の発見と伝わる尾去沢鉱山が位置する。また八幡平山岳地の蒸の湯、焼山、後生掛近辺でも硫黄が採掘されるなど、まさに鉱山のくにであった。

江戸時代には、尾去沢鉱山で製錬された荒銅(粗銅)は幕府の御用銅として、大坂(大阪)の精銅所へ送られ、さらに九州長崎港から貿易銅として国外へ輸出された。

近代に入ると大規模鉱山に洋式技術が採用され、経営や操業形態も様変わりした。物流交易も盛んになり、多くの労働者が集まり、大量の資源が消費された。飯場や鉱夫長屋などが建てられ新しい集落が形成された。鉱山集落はムラやマチの人々とは異なり、農村では食べない馬肉なども食べていた。

また尾去沢鉱山の発見伝説「光る怪鳥」(『獅子大権現御伝記』)が由来となる大森親山獅子大権現舞(県指定)、鉱山仕事の作業唄と作業の所作を踊った「からめ節金山踊り」(市指定)は現在も受け継がれる。鉱山の発展に伴い整備された、康楽館などの福利厚生施設や鉄道は当時の様相を伝える。

5. 鹿角に息づく信仰と風流 -祈り・祭礼・伝統行事-

(1)概要

鹿角地域は古くから豊かな自然資源と東西交通の要衝であったことを背景に、京・大阪・江戸との往来があり、寒冷多雪の山里だが早くから文化が開けた。様々な信仰と季節ごとに多彩な民俗行事が行われ、人々の心の拠り所として現在にも受け継がれている。

(2)内容

鹿角地域は集落ごとにその中心部や小高い丘、森の中に神社を建立し、集落の鎮守として信仰してきた。日々の生活と密接に結びついた祭礼や行事が行われ、現在も地域コミュニティの基層となり、人々を強く結びつけ受け継がれる。また、寒冷多雪の山里であるにもかかわらず、古くから都などから様々な文化が伝わり、信仰や行事に影響を与えてきた。

鹿角地域には「花輪祭の屋台行事」(国指定)など屋台が運行される祭りや「毛馬内の盆踊」(国指定)など大太鼓を用いた行事、中世の芸能をうかがわせる「大日堂舞楽」(国指定)などが受け継がれる。指定の無形の民俗文化財以外にも、集落単位で行われる祭り・行事が多い。

また、馬の生産地であったことから馬の神が信仰され、集落内の神社に多数の絵馬が奉納された。また寺社にはさまざまな像や道具、絵画が伝わる。地域には地蔵尊や供養塔、庚申塔などの石造物が残り、大切に守られてきた。そのほか当講と呼ばれる講が行われる。百万遍や梅花講などの講は、神仏などを拝むだけでなく、飲食を楽しむ日として続けられる。



大湯大太鼓
(県指定、十和田地区)



湯瀬神明社先祓舞
(市指定、八幡平地区)



百万遍
(鹿角地域)



しめ縄作り(鹿角地域)



芦名神社の絵馬(市指定、十和田地区)